

取り組みやすい課題から始まる読むことの学習
〜学級の全員が学習課題を生み出す〜

東京都世田谷区立砧南小学校 西田 太郎

一 はじめに

「子どもたちの初発の感想や毎時の学習感想を、学習計画に生かしたい。」

自ら学ぶ意欲的な子どもを育てたいと考える際には、選択肢の一つとして必ず挙げられることだろう。しかし、全ての学級ですぐに実現できるほど簡単なことではない。

文学的文章の読解において、子どもの考えを生かした授業づくりを行うために、子どもの立場に立った学習課題のあり方を考えた。学習課題を取り組みやすくし、子ども一人一人が自分の考えを確実にもった状態で授業を始められないだろうか。

(子どもが文章から読み取ったことは、想像や感想も含めて『考え』と表記している)

二 取り組みやすい学習課題

学習課題は、子どもに何を考えさせ、どんな力を付けるかが反映される。文学的文章の

読解であれば、作品を味わわせると同時に、次の学習に生きる読みの力を付けるための課題を設定する。設定された学習課題は、導入の工夫によって、子どもにとって取り組みやすい課題へと進化する。

ところが、どんなに導入を工夫しても取り組みたい課題が、教室の子ども全員にとって取り組みやすい課題とは限らない。

学習課題は、どの子どもも取り組むことができ、教室の中で支援が必要な子どもが最もその解決に近い課題が理想的といえないだろうか。支援を必要とする子どもの考えこそ、生かしていくべきである。

初発の感想で一文「おもしろかった」と書いてある。文章全体、もしくは一部が「おもしろかった」と感じさせたのだ。直観的で説明不足だからこそ課題として成立する。この難問の解決に最も近いのは、言葉にできなかった理屈をもっている本人である。

自分の考えをまとめる際、従来の指導では、

叙述を明確にして読み取っていく。実は、その手順が高いステップである。取り組みやすさを重視する場合には、あえて要求しない。具体的には、この段階でサイドラインや書き込みといった個人で読み進めるための活動を行わない。これらの活動は、読み取りが苦手な子どもの負担となり、思考を妨げていると考えるからである。

子どもたちの思いつきやイメージを大切に
して授業を始めたい。文章を読んで、
「どう思った？」

これが学習課題になる。付け加えるのは、登場人物や場面程度の思考範囲の縛りだけだ。

質的な違いは歴然とあるものの、全員の子どもが自分の考えをもつことができる。

三 考えの筋道をたどる

全員が自分の考えをもって授業は進むが、このままでは学習にならない。子どもたちが文章を読んで考えたことには、必ず文章中の

仕掛けが作用している。その仕掛けを探していく。

「なぜ、そのように考えたのか」という発問でペア活動を始める。ペアの活動であることが重要である。全体やグループでは個のつぶやきが失われてしまうからだ。全員が考えをもっている状況を十分に生かすためには、ペア学習が最も効果的であると考える。

- ① 相手が注目したことは何か？
 - ② 想像のきっかけになった叙述は何か？
 - ③ 自分の考え
- の順に友達の想像をたどっていく。①は、友達の想像に対して、だれ（登場人物など）の、何（行動、相互関係など）についての想像なのかを整理する段階。②は叙述を根拠に描写や展開の仕掛けを探っていく段階。そして、③は、友達の想像や作者の書き方の工夫に対して自分の考えを述べていく。
- ペア学習の成果を全体でさらに深める。

四 実践例

初発の感想を使っていく場合は、毎時の目標に合わせて、採り上げる子どもの考えを選んでおく。足りない場合は、授業の始めに指定した内容についての考えを問う。

五年生「注文の多い料理店」での指導を例に挙げる。

まず、初発の感想を書かせる。内容・書き方・作者について自分の感想を書くという観点は指導している。そして、学習計画の段階で、毎時何を読んでいくかだけは、決めておく。二人の紳士の気持ち・山猫軒・白いくまのような犬といったように、場面毎でも登場人物に関わることもよい。

第三時。本時の目標は、山猫軒や山の中の様子、白くまのような犬を表す叙述を根拠に、空間的・時間的な非現実の場面設定を読み取ることとした。

この時間は初発の感想を使って授業を進めた。採り上げた子どもの考えは、
C1「あの店は、げんかくのような感じ。」
C2「鳥がいなかったのは、その店があったからだ。」
C3「犬が生き返った。」

いずれも、国語が苦手だと思っている子どもだ。C1・C2を順に提示し、その都度、ペア学習を行う。C1であれば、

① 山猫軒

② けむりのようにきえ
となり、自分の考えをノートに付け加える。その後、全体で交流する。子どもたちの思考は、「山猫軒は、まぼろし」「山の中も、現実ではなさそうだ」と流れていった。ペア学習で叙述をおさえているため、本文の確認も容

易だ。最後に、いつ現実に戻ったのかを文章で確定するためにC3を提示し、再度ペア学習と全体の共有化を行った。

子どもたちは、犬の生死を議論するのではなく、場面の展開を通じたファンタジーのおもしろさを味わうことができた。同時に、文学的文章における場面設定の工夫について理解した。

五 おわりに

今回の報告では、取り組みやすさに重点を置いた学習課題の設定について述べた。子どもたちは、直感やイメージでも認められることに安心感をもつことができた。さらに、自分の考えをもった状態で学習できることが意欲を生んでいた。読むことの学習において、子どものイメージからさまざまな論理に結びつけ、力に変えていくことが大事ではないだろうか。

今日、特別支援教育の視点を授業づくりに取り入れることが注目されつつある。このような全員参加の形も必要だと考える。ただし、選択肢の一つであり、意図的な年間指導計画の一部である。

にしだ たろう 世田谷区立砧南小学校教諭、平成19
〜21年度世田谷区教育研究員。